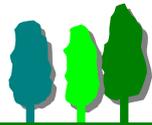


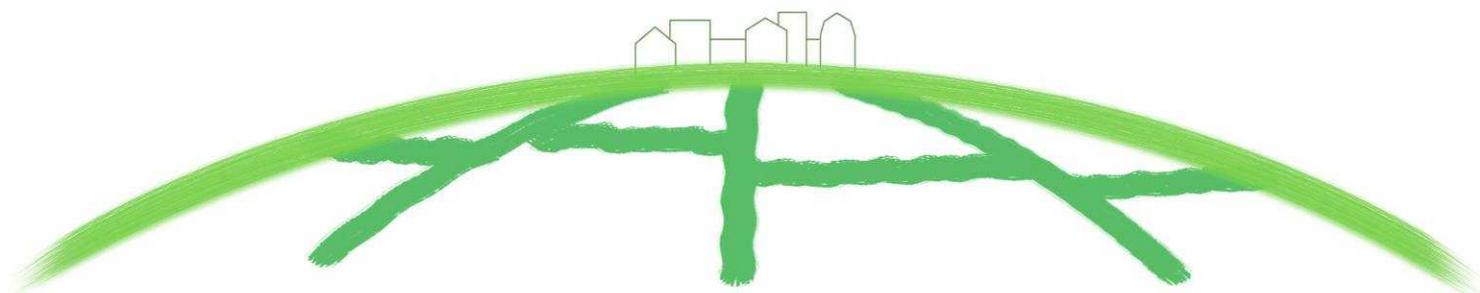
# まちづくりフォーラム

新たな

～いよいよ始まる都市マスの実現～



## 報告書



平成 23 年 3 月

中 標 津 町

# まちづくりフォーラム ～いよいよ始まる 新たな都市マスの実現～

日 時：平成 23 年 3 月 23 日（水）19:00～21:00

場 所：中標津町総合文化会館（しるべつと）コミュニティホール

参加者：フォーラム参加者 120 名

目 的：今年度策定された「中標津町都市マスタープラン」の成果を、広く町民の皆様にお知らせし、「都市づくりの理念と目標像」を共有しながら、町民との協働によって推進する地域主体の街づくりへの積極的参画へのきっかけとすることを目的にまちづくりフォーラムを開催した。

## 次 第

（司会進行 中標津町建設水道部建設課長 渡部英樹）

1．開 会

2．開会挨拶 中標津町長 小林 実

3．基調講演

『「環境首都なかしべつ」のめざすもの』

講師： 北海道大学名誉教授 小林英嗣 氏

4．パネルディスカッション

「都市マスの実現に向けて～今始まる私達の取組み！」

コーディネーター・栗崎勝秀 氏（策定委員会副委員長）

パネラー ・宮脇田鶴子 氏（都市計画審議会委員）

・原怡男 氏（策定委員会委員 / 川西町内会長）

・上原芳昭 氏（商工会総務企画委員長）

・鳴海和生 氏（都市計画審議会委員）

コメンテーター ・小林英嗣 氏（北海道大学名誉教授）

5．閉会

## まちづくりフォーラム ～いよいよ始まる新たな都市マスの実現～

開催日時：平成 23 年 3 月 23 日（水）19:00～21:00

開催場所：中標津町総合文化会館 しるべつと コミュニティホール

参集者：町民ほか 120 人

### 開会：中標津町建設課長 渡部 英樹

皆さまこんばんは。それではご案内の定刻の時間になりましたので、ただ今よりまちづくりフォーラムを開催したいと思います。皆様方におかれましては、時節柄何かとご多忙の中この様にたくさんの方にご参加いただきまして大変ありがとうございます。

私、本日の進行役を務めます中標津町役場建設課の渡部です。どうぞよろしくお願ひいたします。

ここで皆様方にお願ひがございませう。3月11日に発生しました、東日本での大震災でございますけれども、ここで亡くなられた方のご冥福をお祈りするとともに被災された方の一日も早い復興をお祈りすることで、黙禱を捧げたいと思ひます。よろしくお願ひ致します。

それでは皆さま恐れ入りますが、ご起立願ひます。

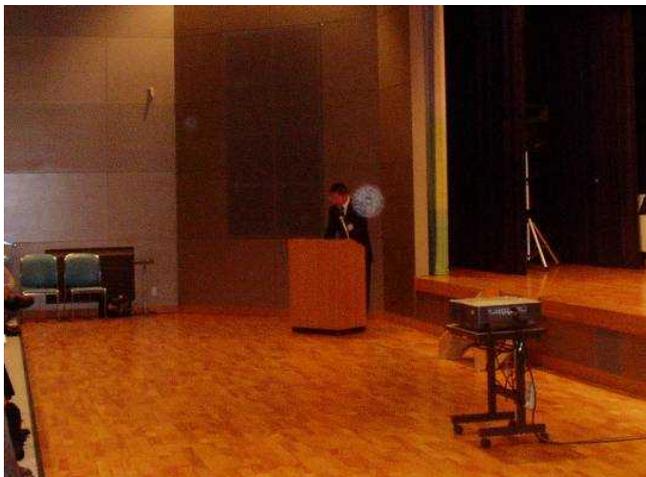
それでは黙禱をお願ひ致します。

（黙禱）

ありがとうございました、どうぞご着席下さい。

本日は受付時に配布させていただきました都市計画のマスタープランの概要版でございますけれども、皆様方のご協力の下、見直しを行い新たなものを完成させていただきました。本日皆様方に配布させていただきましたので、後ほどお目通ししていただければと考えております。

それでは、フォーラムに先立ちまして、中標津町長小林 実よりご挨拶がございませう。



### 開会挨拶：中標津町長 小林 実

皆さんこんばんは。

本日は、年度末を控えまして大変お忙しい中、この様

にたくさんの方のご出席をいただきまして、まづもってお礼を申し上げたいと思ひます。そしてまた、日頃より町政に対しまして特段のご理解とご協力をいただいておりますことを、この場をお借りしまして厚くお礼を申し上げる次第でございます。

ただ今司会の方からお話がありましたけれども、3月11日東日本の巨大地震におきまして本当に大きな被害があった訳でございます。お亡くなりになられた方々に対しまして心からご冥福をお祈り申し上げます。そしてまた、一日も早い復興の為に頑張っていたいただきたいと思ひるところでございます。

この様な状況のなかでこのフォーラムを開催すべきかどうか、色々ご議論がありましたけれども、マスコミ等を通じて改めてコミュニティの大切さ、を痛感致します。

そういった意味でまちづくりを行う上で、コミュニティの必要性を認識するためのまちづくりフォーラム開催の決意をしたところでございませう。どうぞご理解いただきたいと思ひます。

そしてまた、若干時間をいただいて行政として今、被災地に対しての支援について関係部局と協議をいたしまして現段階での対応の仕方等、若干報告をさせていただきますと思ひます。

物資の支給について、現在もう既に防災用の資材を、備蓄している部分において毛布の提供、100枚ほどを3月19日に送付をさせていただきました。

そしてまた水道タンクへの給水袋の関係、対応できるかどうかという調査をいただいておりますので、一応中標津町としては、1,000袋の提供の準備を今しているところでございませう。そしてまた被災者の受け入れ関係では、仮設住宅の建てる敷地について提供できるかどうか、そういう調査もさせていただきます。町として5箇所において1万平方メートルの土地の区分について、用意が出来るという回答をしております。そして公営住宅、今取り組んでいる移住促進の住宅、或いは職員住宅、そういった住宅の提供について14戸を提供したい、そして教員住宅の方も現在調査をしている最中でありませう。それと緊急消防援助隊、皆さんご承知の通り、先日根室北部消防事

務組合で3名の方の派遣をいたしまして、救急車両1台を含めて3月22日から1週間程度の予定で派遣をしているところであります。また町立病院についての空きベッドの状況を被災者のために10床程度、或いは透析患者のベッドを5床程度、町として確保したいと考えているところでございます。

今後色々な要請が来ると思いますが、随時それらについて検討し、対応していきたいと思っております。

義援金等について日本赤十字社、或いは中央共同募金会等を通じてそれぞれ色々な団体が取り組んでいただいているところでございます。それから個人からの救援物資の件についてお問い合わせがあります。受け入れ方法等色々な仕分け、或いは受け入れ態勢がなかなか出来ておりませんので、現段階では町として、決められたある品目を選定致しまして毛布、バスタオル、或いはタオル等について受け入れをしていこう、それも新品に限定させていただきたい、そんな取り組みを今現在もしております。この情報についてはホームページ或いは新聞折り込みで近日中に情報を提供したいと思っております。

それともう一点お願いがございます。原発事故の影響で当地域に与えるいわゆる風評被害の関係、農村地帯がありますので牛乳或いは野菜等についての被害がちょっと心配をしているところでございます。国においても放射線量のモニタリング評価をしております。道においても振興局単位で測定器の配置をしております、定時測定を開始しております。当地域の農畜産物に与える影響等を考えるに安易な発言は控えていただきたいと思いますし、被害をおおるようなことのない様にさせていただき、冷静な対応をひとつよろしくお願いを申し上げる次第でございます。

話が変わりますが、本日開催をさせていただきますフォーラムの関係でありますけれど、平成23年、10年先の目標を人口25,000人と設定をして進めております、新しい第6期中標津町総合発展計画が今年からスタート致します、それと同時に都市計画マスタープランのスタートの年でもございます。本日は北海道大学の名誉教授であります小林英嗣先生に基調講演をいただく訳でありますけれども、先日発生しました東日本大地震の復興計画にももう既に携わっておられます。何かと大変お忙しい中、ご臨席を賜りまして心より感謝を申し上げます。次第でございます。

小林先生におられましては中標津町のまちづくりに長く携わっておられまして、平成13年に策定をいたしました都市計画マスタープランも小林先生の協力をいただき、策定をしたものでございます。今回の見直しにおきましても先生には色々と専門的な立場からのご教授をいただいております。誠にありがとうございます。また本日はパネルディスカッションも予定してございます。コーディネーターとして栗崎先生をはじめ、パネラーの皆さんにも日頃から中標津町の都市計画に対しましてご理解をいただいているところでございます。どうぞ本日はよろしくお願いを申し上げます。

町民の皆さまには今回策定されました都市計画マスタープランの地域別構想の実践の取り組みにつきましても都市マスを暮らしやすいまちづくりのための設計図として皆様方と共有をして行政主導ではなくて地域主権の中で盛り上げていただき、まちづくりの構想が絵に描いた餅とならないように、一つでも二つでも出来ることから取り組んでいただきたいと思います。

結びになりますけれども、今回のフォーラムが新たな都市計画マスタープランのスタートのきっかけとなり、そして子供たちに胸を張って誇れるふるさとへ繋がるように祈念いたしまして開会にあたりましてのご挨拶とさせていただきます。どうぞひとつよろしくお願いを申し上げます。



#### 司会：渡部

それでは、引き続きまして基調講演に入りたいと思います。本日の講師をご紹介させていただきます。

本日基調講演をいただきます小林英嗣先生でございますけれども、北海道大学名誉教授でございます、'臨床都市計画'を身上に全国の自治体と街づくり活動の後方支援を行っていらっしゃる先生でございます。先生の略

歴につきましては、日本都市計画協会会長、そして都市地域共創研究所理事長と数多くの要職に就かれております。中標津町におきましても、長年にわたり中標津町の都市計画審議会会長、そして今回の都市計画マスタープラン策定委員会委員長として多大なご尽力を頂いております。

それでは、早速ではございますけれども、『「環境首都なかしべつ」のめざすもの』と題しまして、小林先生による基調講演に入りたいと思います。

それでは小林先生よろしくお願いたします。

### 基調講演：『「環境首都なかしべつ」のめざすもの』

講師 北海道大学名誉教授 小林 英嗣 氏

小林でございます。

こういうタイトルをいただいて、どうしようかなと思って中身を考えていたのです。実は今、町長がおっしゃっていたように、3月11日2時46分でしたけれど、午前中、民主党本部に居まして、“まちづくり基本法”というのを考える勉強会をやりたいというお話をしていたのです。それが終わって帰ろうと思って帰宅に向かったのですが、途中で地震になりまして、地下鉄も動かなくなって、結局次の日の朝戻ってきたのですが、その中でこのタイトルをどのようにすればいいかなと思ったのです。



こういった災害が起こった時には『3日、3週間、3ヶ月』というのですけども、最初の3日間でどのように救出するか、救援するか。それから、3週間で心のケアをしなければいけない状態の人たちもたくさん出てくる。それでもう10日間経ちましたから、あと10日くらいですか、その中で今被災された方に対して、生きています

という確認といいますが、何で生きていかなければいけないのかなと思う人達も出てくるので、そういう心のケアをするようなことが、この3週間の中で必要となってきます。それから3ヶ月間の中で生活に耐えられなくなりますから、避難所の生活って耐えられないのですよ。僕は神戸の時にそういうサポートをしたのですが、その3ヶ月の中で今中標津でやろうとしている被災された方に対しての生活環境もそうですし、あるいは仕事の環境もシェアする、後方支援するということが必要となってくる。ですから、これから3ヶ月間どうするのかということがもう一つのヤマなのです。それが終わってから何年かかるかわからないですけど、最低10年位はかかると思うのですが、被災された人たちが戻ってきますよね。それをどうするのかということを手厚くしなきゃいけないと思うのです。

今回被災されたのは、ほとんど5万人以下の町なのです。5万人以下の町で『3日、3週間、3ヶ月』というのに実際にかかっても本当に悲しいのですね、3ヶ月経つと。一緒に非常に一生懸命やってらっしゃるのですが、将来の姿っていうのを土木建築的に描く、そういう意味ではなくて...、この間、9日ぶりに阿部くんのおばあちゃんと任くんが見つかりましたけれども、実は任くんというのは小さい時から知っている子どもなのです。お父さんというのが仙台の方で、非常に大人しい子供ですけど、非常にしっかりして自分の思ったことはきちっと、ボソボソとだけけれど言う、そういう子供だったので、良かったという連絡をして、人格的に出来たお父さんですけど、最後に話されたのは、任は幸せな方だ、彼の友達の中でもう親もいなくなって、親戚が誰もなくて自分一人だけ残っているという友達が何人もいるって言うのです。そうするとこのくらいの歳で周りに誰もなくてどうしていいかわからない訳ですよ、そういう人達がたくさんいる訳ですよ。そうするとその人達が人間としてこれから30年、40年生きていこうという実感を持ってもらわなくちゃいけない。そうしないと、いつ精神的に折れちゃうか、わからない。だからそういう事を考えて是非5万人の町でそうやってまだたくさん生きていくなことを5年10年先のことをみんなで考えるなんてとても出来ないから是非手伝って下さいという話をされたところです。

それで、かといってそういう事を中標津の皆さんと話

をしても今すぐどうするという答えが出ないので、多少ヒントになる様なことをお話しできたらと思ったのです。それでその後も実は日本にいませんでした、帰りの飛行機の中で皆さんにお話しするような題材を作らなきゃいけないということでバタバタと作ったので、多少支離滅裂のところがあるかもしれませんがもお付き合いください。



趣旨は簡単なんです。何となく海外の事例で出てくるのですけれども、アイルランドの話です。アイルランドというのは今政権が変わってその前の政権が少し放漫な国家経営をしたうえで破綻してしまったのですけれど、アイルランドというのは北海道と規模がほとんど同じなのです。北海道という島とアイルランドという国、それから人口も北海道は500万人、向こうは400万人くらいとほぼ同じで、違うのが今若い人がどんどんいなくなる、育った子供は全部と言っていいほど出てしまう。漁業と酪農がベースの、あと技術はいろいろありますけれど、仕事がない、町もすさんでいる。ですから育った子供達は魅力がないので海外、ヨーロッパに行く、そういう国だったのです。

それを30年間かけて、ケルティックタイガーと言いますけれど、非常にこう力強い国に、実はしたのです。それにちょっと傲って国債をいっぱい出してみたり、銀行にそれを持たせたり、やらせたので、世界の破綻の中に巻き込まれて、今ちょっとまずい状況になっておりますけれど、非常に最初子供達が国を捨てていく、そういう国をどのようにして変えていったのかということ、ちょっとお話しできればいいかなと思っています。

別に中標津が、子供達が捨てていく町だと言っている訳ではないのですけれど、色々な試みを国、行政から挙げられるけれど、活動グループ、そういう人達が一生懸命

やり時間をかけてくると、その育った子供がそこに残るだけではなくてヨーロッパ中の安全で安心して仕事をしたいという人達がアイルランドに来始めた。そういうようなことをちょっとお話ししようかなと思っています。

そうすると今この「環境首都なかしべつ」をどのように考えるか、これは中身が何であるかということはお手元にあるマスタープランのしおりを読んでもいただければわかると思いますけれど、環境首都とは何かという大変難しいことを話すつもりはなくて、こういう気持ちを自分たちが持ちながら、世界にそれはもう共通して求められている価値なのだ、或いは魅力なんだということ、そういう事にプライドを持って中標津の方が日々の生活をしたり、メッセージをだしたり、行動していただきたいと思います。

それで、別に2万人しかいないのだから小さいことだけ考えればいい、自分たちの身の回りのものだけ考えていけばいいということではなくて、世界の人達が色々な場所を探しているんです。小さな試みだけれど、実は色々な人が持っているという、そのなかで皆さんが中標津の魅力の世界に発するかということを考えていきたいなと思います。

で、あの『3.11』の動きの中で、月曜日にアメリカから戻ってきたのですけれど、その時に飛行機に乗る時に荷物を預けるカウンターのお姉さんに言われたのですが、「なんで原発の汚染が進んでいる日本に帰るんだ」と言われたのです。要するに彼らは福島10キロ20キロの範囲で危険なことが起こっているとは理解していない、日本全体が汚染状態になっているという情報が新聞やテレビに出ているのです。震災の情報をテレビがよく伝えていますが9割くらいが原発の話なのです。そうすると東京の外国人というのは大阪に行ってみたり、韓国に行ってみたり、本国に帰ってみたりして、そういうのを見ていると、日本中が汚染されてしまって酷い状態になっている、日本全体がチェルノブイリになっていると、実は彼らは感じている訳です。けれども、その中で冷静に日本というのはこれだけ力を持っている町、地域が実はあるということ、きちんと出すことが大事だと思います。なかなか国の方で出してくれてないので、是非して欲しいなと思います。

それで、観光業界の方が集まる対策会議みたいなものが北海道であって、ちょっとだけ参加したのですけれど、

中国人がまた来なくなると、要するに中国人も北海道と福岡を区別してない、できないんです。だから、『来なくなった、来なくなった。』と言うのではなくて、自分たちはこういう様な計画、こういう様な環境を自分たちで守っている、という事をアジアのそういうところにきちんとして情報として出しましょう。」という話をしてきたのです。非常にダイナミックに人は動いているんですけど、それぞれの町がどんな方向でどんな環境でどんなことをやっているのかっていうことをきちんとしておかないと一把ひとからげで見られてしまう。

それで、今回東北でああいう出来事が起きましたが、日本の新聞にもそういう事が書いてありますけれど、ヨーロッパ人とアメリカ人の記者でちゃんと見ている人は見えて、日本人の本性、非常に我慢強いとか争い事をしないとか、あれは関西で起きたら、また違う状況になったと思いますけれど、つまり神戸の時と全く違う状況でしたから、ああいう大規模のものは関西で起きたら今の東北の静かな状況ではなかった。だけれどもあれがやっぱり日本人の原型、精神的な原型の一つだと言う親日派の学者というかそういう人達がいます。

そういうことが当たり前だと考えていた時代、別に東北の人達の時代感覚が遅れているというのではなくて、そういう世界に慣れ親しんで来た地域の人ですよ、だから福島の人達と電話で話をすると、何で首都圏のために福島が犠牲にならなきゃいけないと30代後半、40代くらいの人達は言う訳です。

確かに首都圏は日本経済を引っ張っているけれども、全てそういう犠牲にならなくてもいい、我々がそういう活動を支える犠牲にならなくてもいい、自分たちは自分たちの考え方をきちんとして持たなければいけないし、そういう事をこれからやっていきたいとその世代の人たちは言う訳です。

ですから、今まで明治以降、国がトップになって国をこういう方向にドライブするから地域の人達はこれについてきてくれ、国民はこれについてきてくれというのがこれまでだった訳ですね。ところが、何でもお上の言うことを聞くとか、お上に捧げるとかそういうのではなくて、自分たちの町というのは100年かけてすごい価値を見た、それぞれの地域の方が見えにくい努力をしてどんどん来た訳です。そういう様なことを、自信を持って表に出していく、そういうのが多分これからなのだろうと

思うし、そういう意味で北海道を見ると、非常にアジアの中で光る意味深いところな訳です。

ですから北海道に来るヨーロッパ人、或いはアメリカ人、或いは北海道に住もうと思っている中国系アメリカ人というのは、北海道の価値というものをものすごく感じる訳ですね。ですから、それを一つの典型的な例として、この中標津という地域、あるいは道東というのがあるんだと思うのです。

先ほど夕方の飛行機でこっちへ来たのですが、非常にこの山が真っ白できれいに夕日で光っているのです。ああいうのというのは、アジアの人はほとんど見たことがないのです。中国の人ってというのは広大な土地があって、ああいう環境もあるのではないかなと我々想像をするのですが、中国であんな風景って無いのです。アジアの南の方にも当然ない、そうすると、ああいったこれから春を迎えようとしている美しさとか感動を感じられる様な風景、光景が無いのです。

それから今、町長が、野菜のことを話されましたけども、野菜をもの凄く食べるのです。朝レストランに行くと、野菜バーがあって、その野菜をプレートに山盛りにして、そればかり食べている。何でそんなに食べるのかというと、農薬に汚染されていない野菜を市場で買うというのは中国では非常に難しい。だから北海道に来るとパリパリ食べる。それで帰りにお米10kgを持って帰る。そういう様な安全で信頼の出来る食品が沢山あるというのは、実は知っている訳です。それで、別にそれは輸出するだけではなくて、そういうところに魅力を持って、観光というわけじゃないですけど、来てもらえる様な価値というのは実は皆さん持っているのです。ですから風評を云々というのを町長が言われたのは、そういう事もあるのだらうと思います。

それからもうひとつ、人が一生懸命仕事をしている、笑顔の子供達、たくさん的高校生が、一生懸命自分たちの次の努力をしようと思って汗拭いて頑張っている、そういうような事に出くわす訳ですよ、北海道に来ると。実はなかなかそういう国ってないのです。これに日本の場合、お年寄りがどこへでも行って自分が生活出来るという姿が実はでてくると、もうパーフェクトだと思うのです。ですから日本の場合若干お年寄りの居場所というのが無い国ですので、その部分の中標津の中にもっと見えてくると世界的に価値のある場所になると思います。

それで、そういう世界に開かれた新しい力、そういうものが魅力になっていけば訪れる、或いは小学校を使用する、そういう様な日本ばかりじゃなく海外から訪れる、交流する、そういう様な場所だと是非思っていたきたい。それがシンボリックに言うと環境首都と言って差し支えないのではないかなと思うのです。

それで、100年前日本は色々な方が来られて、北海道が作られてきた訳ですね、ですからこれからもっとダイナミックに世界中の人達、若い世代を含めながら住む場所、働く場所を求めながら次の21世紀を作っていくところです。その時にアイルランドというのは非常に見事なチャレンジをしたのです。そのチャレンジというのは北海道で出来ればいい、その中でまず明確に示されるのが、この道東中標津ではないかなと思うわけです。

アイルランドはこのイギリスの横にある、小さい島なのですがけれど、北海道とほぼ同じで、共通な面積、人口、それから自然だとか光景だとか風景美など非常にこう独特な島なのです。

イギリス人みたいにこうちょっと鼻高々ではなくて、素朴な東北人、北海道人によく似ているなと思います。それから歴史だとか文化も、比較的似てるんですね。

それから詩だとか文学だとかというのも共通性がある。それから食べ物、ウイスキーだとかジャガイモだとかというもの。まあそれは食べ物から結局そういうビールだとかウイスキーだとか出来る訳ですけども非常に似ている部分があります。それで、静かな環境なんですね。産業としては町にはギネスしかないといっているのかな。だけれど郊外に出ると巨石文化というものがありまして、今でこそこういう巨石文化がアイルランドの誇りになるとアイルランドの人は思っているけれど、20~30年前は見捨てられていた。自分たちの周りにあるのであまり価値がないと思っていた。でもこれは価値があるんだと思い始めた。それで左から2番目のところに茶色い看板がありますけれど、小さい字で書いてあって申し訳ないですけど、Tidy Town(タイディタウン)と書いてあるのです。

タイディタウンというのは要するに「すごくけばけばしくする必要はない、だけれども人に不快感を与えない、こざっぱりしよう。」そういう意味なのです。こざっぱりした町というのがタイディタウン。町をこざっぱりしよう。それに、絶対気持ち悪さを感じさせない、だから隣

の人、町内会、それから他の町、他の国から来た人達に対してそういう事を感じさせないということをやりたい、そこから始まった事です。これは誰でも出来ることです。これを30年間やります。



それで実は町は大きく変わった訳です。ものすごく巨大な投資をしている訳でも何でもありません。自分たちの身の周りをこざっぱりしましょう。それをコミュニティと書いてありますけれど、700位のグループがずっとやり続けている。そうすると地域が少しずつ魅力あるものになってくる。それからこざっぱりすることによって、そこに訪れる人が来るわけですからお金を落とすビジネスを考えてみたりし始める。それからそういうものを若い人と一緒にやろう。それできれいな町になるのだったら、自分たちもここにきて、戻ってきて仕事をしようとか、或いは安全な環境になるのだったら、自分たちはここへ戻ってきて仕事をしよう、そういう動きに繋がっている訳です。ですから30年間かけて、48年と書いてありますけれど、最初の十数年というのはほとんど見えなかったのです。ですから見え始めたのは30年間、それで結局地域がきれいというか居心地がいい、それから地域でビジネスをしようとする人達が少しずつ増えてきた。それから若い人達、或いは海外から人が訪れてきて色々なことをやり始めたのです。

これは実は戦略がありまして、アイルランドの国のお金、国がつまり破綻していた状態の時ですから、アイルランド国のお金がないのです。けれどEU全体のお金はありました。その頃はECでしたけれど、ECとかEUにはお金がありましたから、そのお金を実は巧妙にアイルランドに入れている。ですから、例えばこの北海道、或いは中標津の自分たちの財政規模はこれだから、これしかできないというのではなくて、先程申し上げましたけれ

ども、投資を募れる様な魅力ある、或いは価値のある中標津だとまず考える必要があるだろう、ですから自分たちの町が良くなるというのは、国の補助金と町の予算だけで出来る訳ではない。それ以外の財政投資も含めながら考えていく、これが一つの戦略だろうと思います。

それで、日本は今、このようにして動こうとしています。このようにしてというのは、それぞれ自立しながら、自分たちの目標を考えていきましょうと実はなり始めているのです。これをどのようにして立法化するのかというのが、先程申し上げました“まちづくり基本法”なのです。

国全体でこうドライブングしていこうという国土計画みたいなものに加えて、実は地域、地域が自立的に自分たちのまちづくりが出来る様な法的な担保をしようと、今考えています。

それで、今冷静に眺めてみると、中標津でもこういう事が起きているのです。公共施設が外へ行く。それから大規模な施設が郊外へ行ってしまふ。それから開発が周辺の安い土地で展開している。そうすると中心部が疲弊してくる。これはもう中標津以外の小さな町も全部そうなっています。

だけれども本当に自分たちの心にもう一回尋ねてみると、皆さんにとってまちというのはいらぬのですか？まちというのは中標津という町ではなくて、私なんかは小さい時に親に「どこ行くの？」と聞かれ「まちに行く」とよく言いましたが、そういうまちです。人と出会える、色々な情報と出会える、ワクワクする、そういうところがまちな訳ですけど、そういうまちって無くなりつつあるのです。

スーパーは沢山あります、大規模なスーパーはあります、あれはものを売っているだけでまちではないです。だから『まちは本当にいらぬのですか。』って、もし皆さん一人ひとりに聞いたら多分皆さんは「まちはいる」って言うと思います。じゃあそのまちって何だろう、或いは皆さんが本当に欲しいまちというのは何かというのを考えていく必要があるだろうなと思います。

そういうまちを壊した「悪霊」って僕は言っているのですけれど、今まで日本人が、日本の行政が全部これは当たり前だと思ってきた3つのことがあります。

1つ目は便利、効率がいい、これが一番といったこと。だけれども少しゆっくり生きようとか、スピードを落



としながら考えようとか、スローライフだとかスローフードだとかというのはもう皆さんだいぶ当たり前になってきています。だから早いとか効率がいいとか、そういうものではなく、ちょっと留まって自分たちの生き方を考えようという、こう最初の便利だとか、効率がいいとかという呪縛というのはどうかなと皆思い始めている。

それから2つ目は、新しい事、新しい事というのがいいのだと。つまり何か話をしていても、ちょっと古いなという訳です。だから新しい事は全て正しいと信じ切っていませんでしたか。けれども今、農ギャルって書きましたけども、山ギャルだとか農ギャルだとか、最近はこの間初めて聞いたのですけれど「間引き効果」というのがあるのだそうです。そういう風に、時代の最先端ではない、そういうところで魅力を感じ始めている若い世代というのがたくさんいる。

それから、将来どうするんだというのを一生懸命分析して、計算して、これは科学的だと、科学的だからこれでいく、としてやってきた訳ですね。町の道路を造る時に色々計算したり測定して、車が何台増えるから道路はこれ位の幅が必要としてやってきた、今度の原発もそうです。全部計算して僕らが学生の頃というのは、マグニチュード 8.5 というのは MAX だと習った訳ですよ。ですから福島原発は40年位前ですから、その当時の彼らの科学的な判断によると、津波の高さは3mというのが定説だった。

それで、建設した建設業の人達、ゼネコンの人達は、3mでやっているのだけれど、それよりも30cm高くしようというんで3m30cmがその堤防の高さになった。けれども一生懸命分析した答えが、結局その予測を越えてしまったという言い方を彼らはする訳ですけど、信じてや

って来たことの限界がある訳です。だから地域、地域の規範、つまり津波の事だけを考えてみても、1000年前に遡って文献を一生懸命探ると、30mの津波が来たというのが文献に残っている訳です。そういう事を無しに、地震学者と何人かの方が3mと決めちゃったのです。けれども地域のお年寄りの中には、そんなことではないよと言う人達も実はいたという話をしているのを私は聞いた訳です。



ですから、地域、地域で物事を判断していくということの重要さが必要だと、それがその『環境首都なかしべつ』ということでないかと思う訳です。

それで、今までそのあすなる物語じゃないですけど、将来自分は大きくなる。そういうのをあすなるという木がありますよね、檜ではないのだけれど、檜に似ているから「明日檜になると、明日檜になると」といって、それであすなるというのですが、明日は今の町、今の規模よりも少し大きくなっている。だから将来はものすごい大きな町になるのだと夢を抱くというのが、地域のビジョンだった、目標だった時代、ですから全部地方都市に行けば、何々銀座というのがあり、自分たちはもっと大きな町になる、もっと大きな人口になるということをやってきました。

だけれども日本全国全体を考えてみてどれくらいの人口になるかというのは大体予測はつくわけですね。そうすると自分たちの町を冷静に考えてみると、自分たちの町が、3万から15万になることはあり得ない。それで自分たちのこれからの経験と自分たちの目標、それからちょっとした努力、もう少し手を出すと、今よりもっと魅力的になる。30m先ではなくてちょっと先、そういう様な将来の姿の描き方というものがある。夢がちっちゃいのではないのかということではなく、それが実は世界中か

ら見た時の魅力になる。

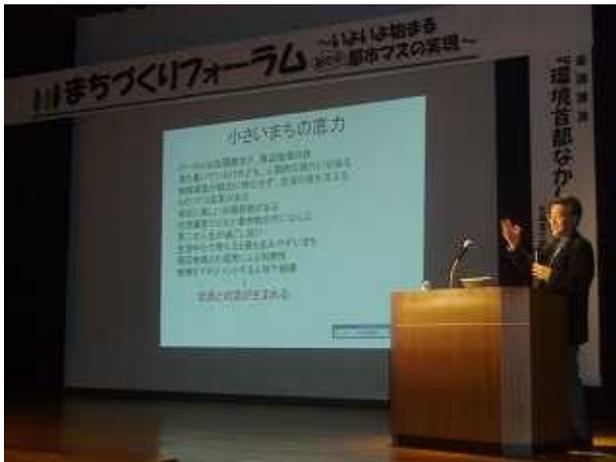
先程のアイランドも凄いお金をかけて町全部を作り直したのではなく、こざっぱりした町にしようという小さな努力の積み重ねってだけの話なのです。

ですので、じゃあこの中標津というのを自分たちのちょっとした努力を積み重ねていく時の最後の姿は何だろうか、といった時にそれは合い言葉として“環境首都”と言えるのではないのかなと思います。これは、札幌が環境首都になるというのは、多分無いと思います。

実は先週オレゴンのポートランドというところにいまして、昔から知っているアダムスという人が市長になったのですが、ポートランドって人口はそんなに多くは無いのですが、彼に帰りの飛行場で偶然出会ったのですが、彼にどこに行くか尋ねたところ、ドイツに行くと言うのです。ドイツは人口20万から30万の町ですが、ドイツのどこに行くか聞いたところ、フライブルグに行くというのです。フライブルグというのも小さいのですけれど、環境にもものすごく配慮して、環境が豊かだから企業がそこに本社を移してみたり、工場をもってきたりする訳です。「俺達は大都市を目指すのではなく、そういう非常に質の高い町にする、住みやすい町にする。それで安全な生活、安全な食べ物ができるようにする。」というようにアダムスという市長は明確に言っている訳ですね。そういうプライドを示すという言葉でもあるのではないかなと思います。

小さい町が大成功するというのはヨーロッパの町に沢山あるのです。今もアメリカでもこういう事が起きていまして、かつては、アメリカは東海岸、ニューヨークとか、ワシントン、ボストンとかあっちの方に人が集まって、五大湖周辺に自動車工場や鉄工所等が集まってきましたけど、今はIT世代になると、ロッキー山脈の西側、ロサンゼルスやカリフォルニア辺りに随分お金が投資されています。でも今アメリカでみんなが住みたいと言い始めているのはシアトルからカナダにかけての地域、それからロッキー山脈の東側の人口2,3万の小さな町なのです。そこに実は新しい企業などが始めているのです。ポートランドというのはほとんどが森林なのです。けれど、NIKEの本社や、世界のブランドというのが結構あるのです。ですので、小さい町というのは、規模が小さいから魅力がないという事ではなく、小さい町の底力って実はあるのだということを是非ご理解し、皆さん

で共通にしたらいいのではないかと思います。それが環境首都でもあるという。



これが僕の整理した小さい町の底力、10 個位あるのですけれど、どれが中標津にあって、どれがないでしょう。

- ローカルな田舎都市で周辺地域の核
- 落ち着いているけれども、人間的な賑わいがある
- 地域資源が観光に特化せず、生活の質を支えるものづくり産業がある
- 身近に美しい田園景観がある
- 近郊農家でとれた農作物が市にならぶ
- 第二の人生が過ごし易い
- 生活中心で考えると最も住みやすいまち
- 周辺地域との連携による利便性
- 地域をマネジメントする人材や組織

ない部分をおろしていけば、足し算していけばいいだろうと思っているのです。

そうすると先程のアイランドの話ではないですけれど、非常に北海道の再建だけではなく、アジア全体、世界全体での人の大きな流れの中に実は位置づけられると思います。

今までの町というのは、生産する基盤、つまり工場だとか、生産するもの、それからそれを支える道路交通網。それからもうひとつは、ミニタウンだとか団地だとか、生活をする基盤。この2つでした。だけれども先程挙げた小さい町の底力に書いてある 10 個くらいの事というのはこれ以外の事がある。それは何かというと、生命とか人間が活着している、人間が安心して生きていける、生活安定、自分が一生ここに住んでもいいと実感できる魅力です。それが生命基盤、それをこれから加えていくというのが小さい町でこそできる訳です。それが何度も言

っている環境首都というシンボリックな言葉になるのであると思います。

それで、じゃあ配分だとか試みだとか色々言っているけれど、どことそれを考えるのか、これは戦略的にひとつぜひ皆さん考えて欲しいと思います。

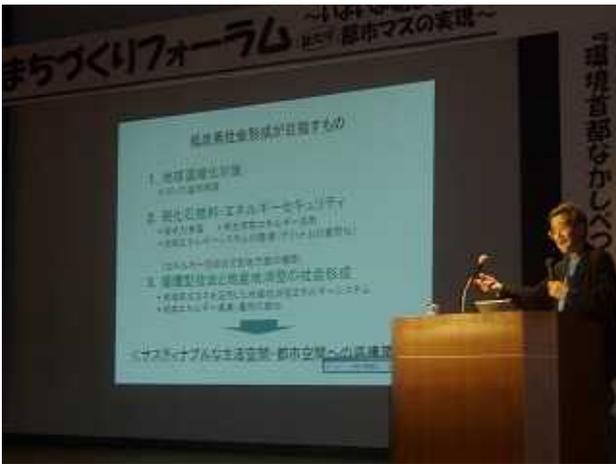
世界の人から信頼される、その価値は十分あると思います。その可能性も価値もあると思います。そうすると、どことやり取りをするのか、という視点がもう少し加わる、そればかりやっても仕方ないのですが、それを頭の半分くらいに入れて考えましょう。

そして、今アジアというのが、これから人口が増えてくると思うのです、これからもう暫くすると世界の人口 90 億となります。そのうちの 60 億はアジアです。

アジアといっても沢山ある訳ですね、一把ひとからげじゃない訳です。どこのアジアと付き合うか、オーストラリアもアジアですが、オーストラリアと付き合うのか、あるいは上海などと付き合うのか、あるいは中東の方と付き合うのか、東アジア、東南アジアの方と付き合うのか、例えばアジアということだけを仮に考えた場合でも沢山あるわけです。そのターゲットを考えていく必要があるだろうと。それを考えさせる、考えてもいいなと、シェイクハンドしようと思う魅力ってあるのでしょうか。それで品格とか、風格とかというものを今、実は求められつつあるのです。それで是非、環境首都というのを少し大袈裟だと思うかもしれないですけど、別に北海道の中の環境首都ではなく、アジアの中の環境首都だと是非考えて下さい。それだけ可能性はあると僕は思います。

それで、もう一方、低炭素に対して色々な魅力的な風が吹いている。投資する、あるいはそれに対して興味を持つ企業もたくさんいる。そういうものに興味を持つ技術者から刺激するような動きもあります。ですので、少し作戦的に、長期的でなくていいのですけれど、低炭素社会というものをどのように自分たちはチャレンジするかというのをチラッと加えておくといいだろうなと思います。

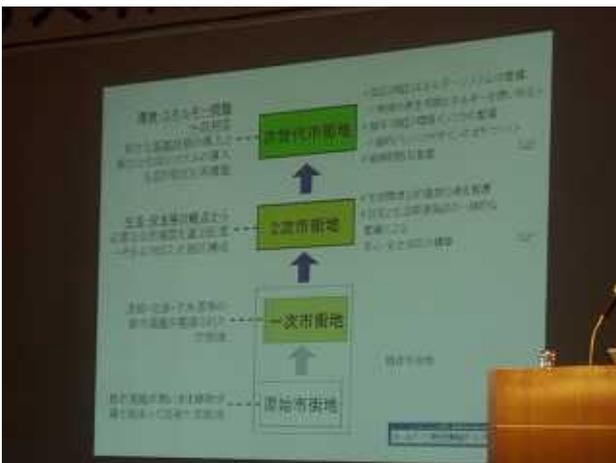
今までは、一次市街地と書いてありますけれど、道路交通、下水道、そういうものが整備された町、というのが一番のベースになる訳です。それから生活の安全という事に加えて教育や、福祉というものを加えながら、より生活し易くするというのが第 2 ステージ。



これからは第3ステージへと突入です。第3ステージの中でどれだけ自分たちがこういう町にしようというビジョンを共有化するかとか、第2次市街地で生まれ育った子どもが、魅力的だ、自分たちはここで生活していこう、ここで一生を送ろうというような魅力的な町に出来るかどうか、これが一番大事なことだと思うのです。

その時に地域の力というものが実は大事で、行政だけではできない、企業だけではできない、住民だけでもできない、全部束ねて力を合わせていかなければできないだろうと思います。

いくつか書き上げましたけれど、自立していく、そういう条件がいくつかあるのですけれど、いくつか中標津は持っているか、無ければ足りていけばいいし、増やしていけばいい。



美しい景観：人間的・循環的  
 ビジョンと戦略：エコエコノミー  
 合意形成とまちづくり規範  
 開発システム転換：利用と所有  
 コミュニティディベロッパー

それを支える担い手というのが要ります。担い手が今い

ない。でも若い人たち、若い高校生もいるし、志を持っている企業の方もいるし、主婦で何かしたいなと思ってらっしゃる方もいるし、それを発見したり、育てていくという事が大事。



それから当然、行政の職員というものも、そういう思いをもっと巻き込んでいったり、支えていくような能力というのが当然必要な訳です。

そうすると大きな対流っていう、今までは向都離村、つまり小さな集落を捨てて都市に向かうという教育を、演歌のようにしてきた。演歌といえばそうですね、要するに自分たちの故郷を捨てて、寂しいところを捨てて、

都に行くとか何かいいことがある、という歌が非常に多かったですね。けど今はそうではなく、逆に都市を捨てて安定している小さなところに自分自身が生き様をちゃんと実感できるところに行こうとなりつつある。それが、ここに書きましたけど徳島の上勝という町がありまして、おばあさんたちが頑張って60歳くらいで平均年収2,000万、そういうことをやり始めた。それを一生懸命言う必要は無いのですけれど、そう仕掛けたのが横内さんという方なのですけれど、ちょっとしたことが町で「よし、頑張るぞ!」というものになる。

それで、このようなことが趣旨な訳なのですけれども、もう一度、『まちはいいですか』っていうと、やはり町はいるのです。じゃあどのような町?道庁がみんなコンパクトシティにしましようと言っていましたけれども、単なるコンパクトシティではない。

じゃあ環境首都は、中標津は...?それをたまたまこう書きましたけれど、皆さんはどういう風に若い世代、次の世代のお子さんたち、お孫さんたちを含めながら考えていくのかということ、このグリーンの部分

関係機関による幅広い連携体制づくり  
住まいづくりと田園都心のビジョン  
プラットフォームとビジョンの共有化

が、これからこの大きな枠組みがありますので、それをもっと増やしていく、その部分だと思います。



今後、その3つが多分必要だろうと思います。書いてあるからすぐに町長がお金をつけてできるだろうという事ではない。ですから先ほどいいました官民含めた連携体制をどう考えるかということ、それから田園都心プロジェクトというのが後ろの方に書いてあるのですが、この田園都心のビジョンとは具体的にどういうものにしよるか、ということを多くの町民の方に公表すること、土地を持っていらっしゃる方もそれに納得するような考え、そういうものをいつも議論する場をつくる。何とか委員会とか何とか審議会というものだけではなく、町民の方がいつも議論できるようなところにする。

それをより具体的に、誰でもわかりやすいようにする、これが必要だろうなと思います。

約束の時間が大分オーバーしてしまったのですが、3月11日に地震を体験して、そのあと1時間くらいでこんなことを考えました。これからのパネルディスカッションに少しでも為になれば、或いはこれから行政がこの都市計画マスタープランを成長させて皆さん共有のものにしていって議論をしていっていただきたいというものの、若干のサポートになればと思います。

以上です。

**司会：渡部**

はい、小林先生どうもありがとうございました。  
先生にはこの中標津はアジアの中でもキラッと光る環

境首都なかしべつというのを目指して頂きたいという想いがあるなかで、今後のまちづくりのきっかけとなる貴重な情報、そしてアドバイスを頂きまして大変ありがとうございました。

ここで小林先生に皆様方の拍手でまたお礼の言葉と変えさせていただきたいと思います。

それではこれからパネルディスカッションの準備を行いたいと思いますので少々お待ち下さい。

それでは続きまして、パネルディスカッションのほうに入りたいと思います。本日のパネルディスカッションに参加いただきます方をご紹介します。

コーディネーターは今回の都市計画マスタープランの策定委員会副委員長を務めていただきました栗崎勝秀様でございます。

パネラーといたしまして中標津町都市計画審議会委員を務めていただいております宮脇田鶴子様でございます。

続きまして、今回の都市計画マスタープランの策定委員会の委員を務めていただき、また川西町内会長を務めておられます原怡男様でございます。

続きまして、商工会総務企画委員長を務めておられます上原芳昭様でございます。

続きまして中標津町都市計画審議会委員を務めていただいております鳴海和生様でございます。

そして小林先生にはコメンテーターといたしましてご参加いただきたいと思います。

以上の方で進めていただきたいと思います。どなたも今回の都市計画マスタープランの見直しに、策定に係わっていただいた方々でございます。

それでは『都市マスの実現に向けて～今始まる私達の取り組み！』をテーマにどうぞ宜しくお願いいたします。

**パネルディスカッション：『都市マスの実現に向けて・今始まる私達の取り組み！』**

**コーディネーター 栗崎 勝秀 氏**

**パネラー 宮脇田鶴子 氏、原怡男 氏、  
上原芳昭 氏、鳴海和生 氏**

**コメンテーター 小林英嗣 教授**

**(栗崎コーディネーター)**

それでは挨拶を抜きにして早速スタートしたいと思います。皆様方、夜分に大変ご苦勞様でございます。

今回私、この都市計画マスタープランの小林先生が委員長で、中標津を代表してというとおかしいのですが、副委員長を勤めさせていただきました。

2年にわたる色々な協議、皆さんのお手元にあります最初のところを見ていただくとわかるように、たくさんの町民の方がいろいろな会合に出られている姿が写真になって載っていると思います。

私は、実はこの町にきましたのは、昭和35年、二十歳の年に中標津の武佐に来ました。教員としてです。二十歳の人間が今、72歳です。つまりこの町で50年、自分の人生のほとんどを過ごしました。そういう言い方はおかしいのですが、大変ではないけれど、こよなくこの町が大好きでこの町に住んでいるのです。よく「お前は母ちゃんもらったから仕方なくいるのだろう」という話もありましたけれど、そうではなく本当にこの町は住みやすいと自分で思ったから、終の棲家をここに求めた、というのが私の実感です。

そういう意味で今こうお見受けしたところ、それぞれの立場で商業、農業、建設業の方とか、教員の方もおられるようですけど、教育を通してとか、いろいろな形でこの中標津を、各業種を通してこよなく愛している人たちなんだ、と私には見えます。そういう意味でこれからもあと僅かな時間になりましたけれど、皆さん方でこの町のマスタープランを理解しながら、小林先生の話にもありましたように、どのような豊かな町というか、住みよい町にしていくか、そういうことで今日はパネラーの方々にも各会から来ていただきましたので、お話を聞こうと思っています。

そういう意味で、実は12月に、ここの場所で高校生を含めたまちづくり交流広場というのがありました。

見られた方もこの中におられると思いますが、その中で去年も今年もそうでしたけれど、あの高校生たちがこの町に住みたいという言い方を、約7割～8割の子どもたちがこの町に住みたいということを書いて、私たち大人はほっとした感じなのです。そういう意味で彼らが誇りに思えるまちづくりが、今の私たち大人の仕事の大きなものでないかと思えます。

先ほど小林先生のお話がありました、あの悲惨な状況の中で阿部任君がああいう人間性を示しながらここから立ち上がっていくのだという誇りといいますか、ここから私たちは生きていくのだというそういう姿を、阿部君

ばかりではなく、あの悲惨な状況の中でそういう人たちがたくさんおりました。そのくらい自分たちの町に誇りを持ち、そこで生きているという、そういう姿が随所に見られたと思います。

そういう意味で今日ではできればそういう気持ちになれるところまでいけたらいいなと思っています。

早速です、この都市マスとって皆さんがお持ちになっている概要版ですけど、これを今ここにおられる4方のパネラーの方々、その係わりと自分の考え方、そういうのを若干先に触れていただこうと思います。

第一次はその関係、計画をお話していただいて、その後は具体的に、先ほど小林先生が言われたように絵に描いた餅にしないでおこう、そのためにはどうするかというところに持っていきたいと考えております。

ひとつ宜しくお願いいたします。

では早速ですけど、こちらのほうから、宮脇パネラーからひとつ宜しくお願いいたします。



#### (宮脇パネラー)

私がこの都市マスに関係したのは最初10年前に策定した時から関係しています。それで、今回この都市マスを見直すといいました時に、前回作った時にはワークショップ、この中にも何人が参加されていた方がいるかと思いますが、ワークショップなどをやって、素晴らしいもの、今回作り出したマスタープランの元になるものが出来た訳ですけど、それが素晴らしかったのですが、それが実行されているのか、計画だけで終わっているのではないかという思いがあったのです。どこで何をやっているのかが全然わからなかったのですが、それが10年経ちましたから見直しますと言った時に、また10年前に計画しましたが、それはやれているのでしょうか、また計画だけ作るのではないのでしょうか、とお話をしたの

です。

その時に色々役所の方も当時の方と替わっていますから、調べていただきました。そうしたら計画しているものが結構やられているのです。それが私はわからなかったのです。計画しているものがどれほど進んでいるのかというのがわからなかったのですが、今回この見直しをかけるに当たって、そこら辺のところは今後わかる様にしてほしいということを出しました。

それで今回は皆さん、冊子の最後の方に係わった方がたくさん載っていますけれど、もう本当にたくさんの方が載っていますよね。これだけの方が係わっている、しかも策定委員としてすごく係わっている。そしてその中で特にいいのは、前は庁舎の中、役場の中では都市計画課だけの話だったのではないかと思うのです。全職員、全課の人が知っているわけではなくて、よく言われる縦割り行政だったと思うのです。でも今回は庁内推進会議というのが出来て、庁内の方全員がこのマスタープランというものをわかってくださっている、計画して下さっているということで、今回のこの中間の見直しされていることをほとんどの方がこの都市マスづくりに係わって、こんなに素晴らしい都市マスは無いのではないかと私は思いました。

私は都市マスって必要なのかなと思った事もあります。けれども、自分で勝手に暮らしていればいいのですが、それではいけないですよね。今回の災害は、中標津ではあれほど酷い災害は起こらないと思いますけれど、安全であり、安心であるまちづくりということは、ここに載っているものは災害を想定している訳ではないのですが、やはり暮らしの中で、安心で安全であるというのは必要だと思えます。それはみんなで考えなければならぬなと思えます。それが今回はすごく達成されたのではないかとあって、私はこの都市マスにすごく期待しています。

#### (栗崎コーディネーター)

はい、どうもありがとうございました。

10年前の都市マスの様子と、現在の今回取り組んだ様子についての比較をしながら、大変よかったというような意味合いのことでお話を頂きました。

続いて原さんの方からよろしくお願い致します。



#### (原パネラー)

それでは、都市マスの策定委員の一人であり、且つ私が住んでいる川西地区の住人の一人として、この都市マスというものをどう受け止めて、これからどのように取り組んでいくかというような点、そういうような問題意識で発言をしたいと思います。

私の基本的な問題意識としては、この中標津は市街地と農村部、いかに共生していくかというのが基本的な私の問題意識です。その為に今色々な視点や方策があると思いますが、全部触れると大変ですので安心・安全なまちづくりの面から2つ申し上げたいと思います。

この問題を考えている時には、私が今一番問題意識にあるのは、誰が、どんなことをすればいいのか。なるべく具体的に取り上げていく、そういう視点が私は重要であろうと思います。先程から絵に描いた餅にしないというのはそういう事が一つの大きな要素ではないかと思えます。

具体的に申し上げます。今回の大災害は本当に予想を絶するような災害に直面してですね、中標津に置き換えると、この中でも安全・安心のまちづくりということで基本的な視点とか、方針がでておりますので、これは、そのなかで私たちが思うのは、災害についての意識、これはやはりもう少し高めながら防災の体制を作っていく。

これは行政もあると思うし、地域、私の所属している町内会でもそういう事を考えていかなければならないと思えます。

一つ防災意識という面から事例を言うと、前の北海道東方沖地震がありましたね、平成6年です。その時は釧路市が震度6で、中標津は震度5でした。病院にかかった人は圧倒的に中標津の方が多かったという記憶があります。

なぜか、というのが問題です。そういうのがきちんと引き継がれていなかったら防災意識としてはまた同じ事を繰り返すのではないかという気があります。

一つの原因としては、2次災害なのです。開き戸の戸棚がそのままになっている。釧路市辺りは何回も体験しているからそれをフックして中身が飛び出ない様にしている。そういうのが全部崩れて怪我をして病院に行った人がものすごく多いと聞いていました、それが一つです。

そういう事が、例えば直下型の地震があるから転勤して来た人には全部タンスなどが倒れない様にフックをしたり、開き戸をちゃんとするというような、そういう安全意識をきちんと受け継いでいく体制というか、それが防災体制の一つの要素ではないかと思えます。

二つ目です、町で今災害が起きた場合、70歳以上で支援を要請される方の全部名簿を町内会にいただきました。

そこで町内会としては、地域で支援される方をお願いしています。この間の3月11日の地震の時にも町内会でも地域の支援策、直接行って安否を確かめて、たまたま町内会長をやっているので私のところに安否の報告がありました。本当にそういう事が、人が一番困っている、お一人の生活者が多いですから、高齢者です。

自分がもし万が一、倒れて下敷きになっていたらどうなるか、それはやはり町内会というか、地域として人の繋がりが一番大事ではないかと、それが防災体制の基礎になると思うのです。組織は私のところもまだ出来ていません、これからです。でもそれが基礎になるのではないかと考えています。

安心・安全という面からですね、ひとつ大きな課題があります。

高齢者がだんだん増えてきます。それから社会的にお一人で生活する方も結構多くなってきています。虐待の問題なども色々でてきています。そういう要するに社会的に孤立したり、何か一つ問題に対して行政の対応、当然求められます。けれど、実際に隣に住んでいて、人の様子が繋がらないというか、わからない、意識のなかでも稀薄になっているというのが現状です。私のところでも未だによくわからない実態が沢山あります。そういう問題をきちんと捉えて、隣人を見守る地域のコミュニティをどう作るかという事が、これから大きな課題になっていくのではないかなと思います。

この中にいくつか視点や方策があるといったのは、私ど

もの町内会としてもこれを受け止めて。

それから先程言った町の方で70歳以上の方を全部調べて、希望があるか無いかも調べてくれた、これは町内会では出来ません。町がきちんと調査をして、私どもの方へリストをいただいたので具体的な対応ができました。

被害が大きければ町内会で仮に救援に行くといっても、手に負えない場合がございますよね、そういう時には町にはきちんと報告したり、消防の方をお願いするとかいうことをしなければなりません。

したがって、行政と地域の役割とか、具体的なものになればなるほど密接に協働していける可能性があるのではないかと、この様に私としては考えています。

以上です。



#### (栗崎コーディネーター)

はい、ありがとうございました。

原さんの場合は、もうあえてお話しするまでもなく、町内会の地域としての取り組みみたいなことで今お話があったと思います。

それでは次は商業を代表してというか、商工会の方の関係で上原さん、ひとつよろしくお願い致します

#### (上原パネラー)

はい、上原でございます。

商工会の総務委員長としてパネラーに挙がっていますが、商工会を通して私が確認したことについて、ですからある意味で私の知恵となりまして、商工会の答えではありませんので冒頭で話をしたいと思いますけれど、昨今の行動を見まして、本当にまさに今コミュニティづくりと言いますか、横と横の繋がりが必要なのだということに改めて強く感じました。私も今お話しされた様に私は中央町内会に住まわされていて40年になります。そしてそれを通して商工会も町内会会員になっていただ

きました。商工会、自治会を通して色々な形の中で勉強会とか、一番やっているのは4、5年前からずっとやっています『まちなか賑わい 秋の陣～清流物語』これは、我々理事と商工会会員、そして行政と一体となってきた事業で、まさに連携事業で最たるものでないかと思えます。同時に、商工会としても活性化事業の支援を受けていますので、それに伴って私達がやっているのをごさいますけれど、やはりわれわれが横の連携を図ることが凄く大事だと同時に、また2年前から職員、理事、町職員と年に毎週くらい話し合いを持って、今の町の動き、商工会の考えはこうなんだという話を今、本当にこのマスタープランが出てすごく話し合いをしています。それを行っているうちにマスタープラン策定が大体決まりまして、皆さんわかると思えますが、大体このことが大事だと思います。



ただ商工会というか、中心市街地に住んでいる私としては、やはり観光的なものも考えていかなくてはいいけないと私は思っています。やはり中標津の顔であります開陽台を通り空港、そしてゆめの森公園、そして丸山公園周辺とそれから中心市街地、この点を線に結んで何とか中心市街地に人が集える様な場所を、ということを常に考えています。

丸山公園を考える会に2年間かけて勉強会をしたり、町職員と我々が真剣な議論をしたり、それから中心市街地、今回はこのマスタープランに向けて特別な仲間が集まって喧々諤々と話をして、実際どうすればいいかということとやって来ました。その答えの凝縮されたものがこの本でございませう。特に今、町を二分しているタワラマップ川がありますけれど、あれは5年間一生懸命我々が必死になって、活性化の補助金も出ていますけれど、頑張った結果があつた町なみがこうして、町長にも理解いただ

いて親水型公園ができた。それにまた嬉しいことに青年会議所のシニア会の皆さんから四阿を寄贈してもらって、それを利用者が作ったという、本当に官民一体となった見事な事業ですよ。これからまさにそういう事が必要になっていくのではないかと思います。

ですからこのマスタープランを通して、改めてまたみんなとこれから何年間、こういった話とかあればいいかなと思えますし、今までは経済がこの様な状況になりつつも確かにみんなが願ったら叶って来ました。しかし、これからその夢をどう進めていかなければならないかという事になっていくもので、実践に向けてやる、しかし予算がない、そうすると知恵を出し合ってその知恵をみんなによって行政に働きかけていく、その知恵がこのマスタープランでないかと思えます。それと同時に町長の前で失礼なのですが、町長の公約にもでていますが、中心市街地を活力あるものにしたいという事で、何とか中心市街地に向けて人が集える場所、行きたい場所、時間が費やせる場所、遊び体験空間、ビューポイントの景観空間、美食グルメ空間、そういうものを作って、私たち住民が自慢のできる場所づくり、私たち住民が自慢のある場所をみんなの手で作ることによって私たちが楽しければ他の町からも来てみたくなる。そのような中心市街地をみんなと共にこれから作っていかねばいいかなと思えますし、商工会の名前を借りて申し訳ないですけど、一緒になってみんなと相談しながらやっていければいいなと思っております。

私は先ほどから言っていますけれど、これから町内会を取りまいて地域町内会ありますけれど、後でもお話したいと思えますけれど、町内会側と話し合いながら進めていきたいと思えますし、特にこの中心市街地の改革を私は期待しています。

今ある公共施設の利用の仕方の検討とか、タワラマップ川沿いの環境道路をずっと上の方でもう少し環境を維持すると、町を二分しているデメリットをメリットとなる川にして、そのメリットの川を町のやすらぎの空間に出来ればなということと今、『タワラマップを考える会』山崎先生がやられて、今は野毛さんがやっておられますけれど、みんなでもた考えていければいいかなと思えます。

やはり今までは夢は叶ったけれど、これからは叶った夢を、更にどう繋げていくかということはこの都市計画マ

マスタープラン策定を通じて、みんなの考えがすべてこれに凝縮していますので、これを利用しながら勉強を図って進めていけたらいいなと私は思っています。以上です。

**(栗崎コーディネーター)**

はい、どうもありがとうございました。

現在、商工会ばかりではないのですが、幅広く取り組んでいる、例のまちなか賑わいの秋の陣のというような催しものを通して、今の願いというか、そういう事について触れたようです。

次は、鳴海さんのほうからですね、都市計画に係わっていることもありますし、安全・安心まちづくりのみにならず、関連する都市マスという意味でひとつ鳴海さんの想いを述べていただきたいと思います。どうぞ宜しくお願いいたします。

**(鳴海パネラー)**

鳴海でございます。宜しくお願いいたします。

私は、平成21年にこちらの都市計画審議会委員としまして、当初、中標津青年会議所の代表と致しまして、こちらのほうの委嘱を受けさせていただきまして審議会、フォーラム、ワークショップ等に参加させて活動させていただいておりました。

中標津青年会議所として地域の活力というか、少しでも町が活性できるような動きをするという意味で当初動いておりましたし、私自身も出身が実は青森の方でございまして、中標津に来たのは2002年でございます。

それで、青年会議所に入らせていただいたのもそうなのですが、こちらの都市計画審議会に入らせていただきまして、中標津の魅力、これを改めて感じさせていただいた、「あ、ここはこうなっているんだ。」とか本当に感動させていただきましたし、これをやっぱり実現していくべきだなと思います。その一員としまして、若手の代表といえましょうか、実働部隊といたしまして、これから頑張っていく一人として選ばれて、今ここにいるのだという感じしております。

先日の3月11日の大震災がございまして、当然安全・安心、それは本当に大切なことでございます。残念ながら私もそうだったのですが、避難所がどこだとか、そういったものが本当に町民の皆さんがわかってらっしゃるのかなと、私自身もわからなかったのも、その辺を再度町民の皆様を知っていただきたい。それが核となりまして、先ほど小林先生の方でもおっしゃっていただきまし

た、この中標津がござっぱりとした不快感の持たない、住みやすい、そういった町になっていきますよう、頑張っていきたい、という思いでこれからもいしますので宜しくお願い致します。



**(栗崎コーディネーター)**

はい、ありがとうございました。

今4人のパネラーの方からお話を頂き、それぞれの立場とそれぞれの想いという意味で、このマスタープランをどう受け止めて、これからどのようにしようかなという感想を含めてお話いただいたのですけれど、具体的に、最初に宮脇さんがおっしゃられていたように、正直言いますと私も都市計画法なるものがあって、それぞれの市町村でそういうものを作らなければならないというか、作って計画を立てなければならないというようなことは、私も教職生活が長くなりながら知っていたつもりでしたけれど、10年前に始められた方はよくわかっていたと思いますけれど、一町民としてはそういうものは良く見えていなかった。もちろんこういうようなコンパクトになったものも配られたのでしようけれど、まあそれは誰かがやればいよいよというような感じで受け止めていたというのが率直な私の気持ちなのですが。

やはり実際にこう参加してみても本当に色々な議論をしてみますと、具体的な例でいいますと、役場と病院、消防と病院、こういう関係の地図的なことをちょっと皆さん思い浮かべてください。いざ災害が起きた時に、これで本当にいいのだろうかという問題があるのです。それなどもこの都市マスの中でかなり論議されました。そういうのを具体化していく上で、全く無方策にやったわけではないのです。それはそれなりに意味があって多分やられたと思うのですが、やはりこういうマスタープランというようなものがある程度決められていて、それに絶

対従わなければならないという訳ではなく、それを目指しながら私たちに居場所、いい場所を作っていくということがこのプランの狙いだと思うのです。

そういう意味で、これをより具体化していこうという話まで既に出ているところもあるわけです。それを今日はお話していただいて参考にさせていただけたらと思いますので、早速ですが、先ほどかなり熱弁をなされた原さんが町内会長をなさっていて今回の都市マスのことにも係わっていたなかで、先ほどの話では高齢者の話などもすごく大事な計画の中の一つなのだというようなお話もありましたが、ちょっとそういう取り組みを今企画されている最中ですので、具体的に言いますと、『地域街づくり協議会』的なものを考えていらっしゃるというようなことで、具体的なお話を聞きたいと、宜しくお願いいたします。

これから第2回目の話し合いをしていきます。



#### (原パネラー)

それでは機会が与えられましたので、このお手元の 23 ページをお開き頂ければありがたいと思います。

ここにコンパクトに西町地域、西町と川西と町内会が2 つですけど、ずっとこれまでに色々話し合いをしてきました。これからお話しすることは今の段階では私の構想ということで最後にどのように行っていくか申し上げたいと思います。

まずこれを見ていただいて、下のほうのまとめというか、枠でくくってあるところがあると思いますけれど、川西、西町の地域の課題と言ったら、下のほうに全部まとめられています。それで特に一番身近なもので言いますと、例えば快適な生活道路、下水道とか色々あります。これを確保した住宅地の形成という辺りは地域からの最も強い要望があります、もう肌で感じます。

その他に公共の交通ネットワーク、そういうような点、しかも他の地域からも出ているので共通の点となっていますので、そう受け止めて下さい。そういう点はこれから引き続きどのようにこれを取り組んでいくかもやっていかなくてはいけないと思っています。

2 つ目に、最近テレビでも皆さんコマーシャルでご覧になっていると思います。『見方を変えると味方になる』というのがありますよね。都市マスの中で、途中で視点が変わったというか、私なりにあっと思ったことがあったのです。それは何かというと、「西町、川西の地域の魅力は何ですか。」という問いが寄せられたのです。これは私にとって非常に、さっきは中標津の魅力というところまで色々研究するとしたらこれは大変、もっともっと情報が必要なのです。自分の住んでいるところの魅力自体もなかなかこれ！とはっきりそう簡単には言えない自分がありました。策定委員会の中で色々検討した中で、この一番上に出ているこのテーマというか、目標がそれにあたるのかなと。『緑豊かな環境を暮らしの中に活かす街づくり』これは西町・川西・或いは他の地域でも共通に狙えるテーマなのかなと。

それでさっき言いましたように、この都市マスが実際に実現されていくためにはもっと具体的な取り組みを想定していかないと本当に絵に描いた餅になるのではないかなという気がいたします。

そこで“緑豊かな”これですね。目で見ても、これ私の実感なのですけれど、中標津自体他の町に比べても非常に緑豊かです。それから中標津の中でも西町・川西というのは、私は緑が豊かだと思っております。本当のところ、こういう形容詞で言うと豊かさというのは、インターネットで調べると、「緑被率」として今、全国的に出ているのです。『緑被の面積に対して行政の面積の割合×100』、ちなみに札幌では 19.9%と聞いております。東京都の墨田区は驚くなかれ、9.4%です、緑の占める比率です。中標津はですね、これは正式には航空写真を撮らなきゃいけないので、大変な問題ですけど、ある私が見た資料では 54%あるというのです。これは先人のものすごい英知が働いて今日の中標津の緑の豊かさを突きつけると、本当に頭が下がります。

そこで川西でじゃあどうするかといったときに今想定される具体的な活動イメージとして、大きく二つほど考えています。

一つは今、川西や西町にある緑の名所と思われるところをちょっと実際に歩いて、どんな名所があるかを一応歩いてピックアップしてみようと、ある程度歩けば地図が出来るだろう、という構想です。マップを作ってやがてはそれを町民の方にお知らせするというか、発信出来る可能性があるのではないかと考えています。

それから西町・川西にはですね、それぞれ個人の家に含めても、庭造りがかなりされています。これは花とか緑を育てるといった観点からみれば、魅力の一つに挙げているのではないかと思います。ただこのままでいいわけにいかないのも、もっと庭造りのあり方、それらのことについてはよく勉強していく必要もあるのではないかと考えています。視察したり、勉強、学習をする、それが更にオープンガーデンというようなことにまで構想が繋がっていけばもっといいのかなと思います。

そういうものを、具体的に取り組んでいってはどうかと私なりに今構想をしているのです。それで4月3日に川西では総会があります。そこで私は、この今お話したことを総会に提案します。皆さんに賛同が得られるかどうか、そこからスタートです。誰かが発信しなかったら、これはこれでもう終わりですね。「ああこういうこともあるのかな。」くらいで終わっちゃうのですけれど。

そして次に西町さんと今度はお話し合いをしなければならぬと思います。

そしてそれを推進していくための協議会を、そういう共通理解を得られれば、こんなような取り組みをしていく協議会が必要でないかということであれば、川西・西町両方でお互い委員を出してやって、活動に入っていき、そんなようなことですね。

さっきの写真にしても、これをやるとしたら最低でも1年はかかると思います。季節によって名所といわれるところは全部変わりますから。それに名所作りとなるともっと時間がかかります。そういう意味でこれが10年先、5年先くらいある程度見越していかなかったら、ならないんじゃないかなと思います。

それからお気づきのように、例えばマップ一つ作るにしても、写真を撮ったり、それをマップに表すとなれば絶対にお金がかかります。それは、現在はゼロです、ありません。それでこれ、町のほうから予算があるからやってくれという事業ではないのです。地域でどれくらいやれるのか、それを説得のできる提案ができれば、町のほう

へ行ったら私は要請する段階がくるのではないかと思います。先ほど言った庭造りの学習会にしても、どんな人がどのように常に庭造りの学習についてできるのかを、ちゃんとリサーチしてそういうものをセットしなければならない。それも人やお金がいっぱいかかると思います。それは町内会ではありません、ですからそういうのを何か年かの計画を立てて、町のほうに要請する。それがどの程度審査されて認められるかわかりません。けれども一歩一歩やれることにそれを積み上げていこう、ということが大事ではないかなと思います。そういうことで地域町内会と行政との係わりが必ず出てくると、私は思います。

これはどこから発信してこれをやるかというのも問題なのですが、私が今やれる範囲は、大変ささやかですけど、町内会で第一歩を皆さんに提案して、「よし」ということになれば一歩一歩積み上げていける可能性はあるのかなと、今日はそのようなことを皆さんに、私なりに考えていることを申し上げました。以上です。



#### (栗崎コーディネーター)

はい、どうもありがとうございました。

まだこれからのことなのですが、かなり具体的に取り組みを始めたいということを提案する内容として、今町内会長という立場でお話しをし、更にそれを西町の方にも広げていきたいと、川西から西町のほうに広げて、西町地域を考えていきたいという様なことの提案がありました。

今、原さんの話を聞きながら、上原さんは今度は中心部になると思いますが、それも含めながら、今のお話を聞いてどうしようかなという様なことを、構想の段階で結構ですのをお願いしたいと思います。

#### (上原パネラー)

今、商工会の周辺にですね花通り委員会も非常に一生懸命花を咲かせて、商工会女性部は中央通に花いっぱい運動を進めて、花を少し前面に出していこうとしているのですけれど、今、この中心市街地、中心部地域に関しては、ここの場所で数度となく皆さんKJ法等を通して、意見を出し合っ、全ての意見が出て、全てを網羅する、これに関してやるとなると膨大な事なので、それを一体どこから手を付けたいのかと。

私の中心部地域には9町内会がございまして、いつも町内会長さん、前町内会長さんにご参加いただきまして色々会議をしてきました。私も個人的視点でございますけれど、9町内会でそういうプロジェクト、名前は『地域都市マス連絡会議』なんかをどうか立ち上げて、その中で今、しなければならないこと、今、中心市街地に必要なことは何なのかということ、今日、中央町内会の菊池会長さんも見えていますけれど、会長さんの世話を借りながら、あと8町内会の皆さんと話して、何とか中心市街地に今何が必要なのかということ、それをまず話して、それをまた9町内会の役員さんを集めて、発表会をして、今これが必要なんだという様なことをして、それを今度他の6地域に発信して、みんなでやってもらいたいなと思っています。

その為には、原さんに負けない、西町地域に負けない、9町内会で連携して、中心市街地の在り方を議論して行って、それを行政に反映させていきたい。そうすると行政のほうも、それは賛成せざるを得ないかなと思われ様な、そういう力強い会にしていきたいなと、私はそう思っています。

やはり今、予算がないのかわかりませんが、予算がない状況の中で、どう予算をみつけるかといひますと、やはり6地域で協同徒党をとりながら、一番優先はどこなんだ、これは中心市街地でなくても、西町に行くかもしれません。でも、その中で6地域で集まって、今年はやっぱり中心市街地のあそこに持っていかと言われる様な協同体の発表を持って、5地域に負けない様な、私、勝手に失礼ですけど、9町内会の会長さんと役員さんに協力いただきながら、そして商工会という力強い仲間とともに中心市街地を発信できればなと思っています。この後、菊池会長に怒られるかもしれませんが、一回集まる機会をもって、西町地域に負けない様な動きをとりたいなと私は勝手に思っています。よろしくお願

します。



#### (栗崎コーディネーター)

はい、ありがとうございます。

続いて時間があまり無くなってきましたので、大変申し訳ないのですが、手短かに鳴海さん、原さんの様な地域の取り組みなどを聞いてみて、鳴海さんなりに感じたことを、ちょっとお話ししていただきたいと思ひます。

#### (鳴海パネラー)

はい、ありがとうございます。

私も最近ちょっと太り気味になってきて、歩く機会を普段から作りたいなと思ひながら、どこをどのように歩いたらいいのかなと思ったりしながらいるのですが、原さんがおっしゃっていたように、緑を見ながら歩いたり、中心部を探索したり、私の仲間関係では網走だとか、釧路だとかにいますが、ゆめの森公園にたまに遊びに来たりするそうです。その後、ゆめの森公園から西町地区、そして中心の方にずっと下がって歩いて来れる。そういった環境を私も是非作りたいなと常々思っておりまして、総会がとれましたらぜひ一言かけていただければ、お手伝いできればと思ひます。よろしくお願ひします。

#### (栗崎コーディネーター)

はい、どうもありがとうございました。

それでは最後になりますけれど、宮脇さんは先程10年前の都市マスにも係わっていたというような事もありましたけれど、今パネラーの何人かのお話を聞きながら前回との違いというものを感じておられると思ひます。

それと同時にこれから具体化をどうしていこうかなという様な想ひがございましたら、ご発言いただきたいと思ひます。

#### (宮脇パネラー)

今回、このフォーラムをやって、前回はたしかフォーラム、都市マスができた時にやったのではないかと思うのですが、その時にこの実現のためにという事でこれほど皆さん熱く語っていなかったような気がします。

そして今回のこの都市マスの冊子の最後の28ページに、具体的に地域まちづくり活動をしましょうという事で、推進しますという事で載っているのですが、各地区に分けてまちづくり協議会を作って、それを実践して、そしてどのように進行して管理していくかという、具体的な事が載っているのですよね。前回これほど具体的な事は載ってなかったと思います。実現をするための方策という事では載っていたと思いますが、これほど具体的な事は載っていなかったし、またこうして参加して下さる皆さんが、是非実現しようという気になっているというのは、この10年の中では無かったのもあるし、ここ1、2年でマスタープランを考え、見直しをかけたという事は、すごくよかったのではないかと思います。

それと、皆さん今、町内会や商工会単位、団体単位で考えておられるのですが、団体に参加できる方はいいのですが、参加したくても参加できない方が、やはり個人的に私は無理だという人もいるかもしれないのです。でも参加したいという人もいます。そういう人が気軽に参加できるような、街づくり協議会であっていただければいいかなと、今思っております。

#### (栗崎コーディネーター)

はい、どうもありがとうございました。

ご参加の皆様方のほうで、聞いていてでもいいですし、せっかくの機会ですから、時間がもう少しできてしまいますけれど、せっかくの機会ですから、何か感想でも結構ですが、フロアの方からお話しいただける方いますか。

はい、どうぞお願いします。

#### (会場：田中さん(南町町内会))

南町町内会の田中と申します。

今回の被災をずっと見ていて、一番酷いのは水とトイレだと思います。

今は山の通りなどで使うトイレというのはバイオマスというのか、細菌を使って、臭いのしない、いいトイレが製品化されているのですよね。

そういうトイレを中標津の南町の公園にもトイレはあるのだけれど、あれは冬の間使えない。それはなぜかと

いうと、寒くて水道が壊れる。バイオマスのほうはそれが無しに使える。そういうような方向に持っていけば、中標津が、それこそかなり豊かな、そして災害にだって、災害の時には水洗トイレは使えないのだから、そういう様な事を考えて欲しいなと思いました。個人的な意見です。



#### (栗崎コーディネーター)

はい、どうもありがとうございました。

他の方で、どなたかもうお一方くらいお話をききたいと思いますが、どなたかよろしいですか。

急に振られても、という事があるかもしれませんが、色々な想いが錯綜していると思いますけれど、今、第2セッションでお話があったように、先ほど都市マス概要版の28,29ページに具体的な方策がこれから考えられますよ、という提案が実はしているわけで、かなり絵に描いた餅に終わらずに済むのではないかと、これからの方向みたいなことが具体的に出ていますので、是非中標津を、私たちが本当に誇れる町にするために、皆さん方のこういう取り組みをしていきたいと。

実は今日はそういう意味での皆さん方と顔を合わせてお話しをする第1回目だったと、このあとこういう機会を多いに持ちながら、色々まちづくり協議会みたいなものにまで発展して、このまちづくりが上手く進んでいけたらいいなというようなことを、お聞きしながら感じました。

最後になりましたけれど、時間が少なくて申し分けありません。もっともっと熱く皆さんで語りたいたいのですが、小林先生のほうから今のお話を含めて、先ほどご提案いただいたのですが、更にアドバイスをいただけたらなと。大変申し訳ございませんが宜しくお願いします。

### (小林コメンテーター)

2つ感じました。

一つは、走り出すお金は、特に最初は求めないけれど、それぞれの地域で住民の方と具体的な一歩二歩をやりましょうというお話で、これは非常に大事なことだと思います。ただ、そればかりやっていると、住民の方の負担になりますので、行政のほうでも何らかの、日本の場合は補助金を出すからその補助金を使って何かやってくれ、成果は問わないけれど、という感じが強いのです。だけれども先ほども申し上げましたアイルランドの場合は、今おっしゃられたように、こういうことをやりました、来年も続けていきたいので評価して金をつけてくれ、というやり方なのです。

ですから非常に皆さんのおっしゃられていることは一歩二歩先へ進んでいるという気がします。それで、是非多額の金額でなくていいのですけれど、そういうフォローを、5地域に対しては行政がフォローをするということをしていくべきじゃないかなと思いました。

それからもう一つは、もう1地域。つまり中心部なのです。中心部というのは6地域のうちの一つではなく、町民にとっては非常に大事な場所なのです。それをどうするかということ、最近のよく使う言葉で言うと、『見える化』と言いますが、見えるようにするという訳ですけれど、『見える化』することが必要である。なんとなく賑わいをしましよとか、みんなの居場所にしましよとか、何とかかんとかといっているけれど、具体的にどこで何をやるんだ、そういうのがわからない。それを『見える化』する必要があるだろうと思うのです。その『見える化』というのを行政にやって下さいという話になると、さっきの話ではないけれど、自分たちでやっているというプライドもなくなってしまいます。

それで是非支援していただきたいのは、民間企業なのです。つまり、商工会の年間の予算というのは知りませんが、商工会が自前でお金をだすということと、それからスーパーや銀行だとか、そういうところがお金を出して、『見える化』をするということをやっていただきたい。

それはどういう方法があるかという、例えば『見える化』の姿を描き出すのを5チームの競争にする。5チームというのは、必ず1つのチームには中標津のまちづくりグループだとか、設計事務所というようなものが入っ

ている。もう一つ中標津以外の、それは札幌でも東京でもいいのですが、市民が入って1チームになる、それで住民の人と話をしながら案を作る。案が1、2、3、4、5と出てくるわけです。まあ、3チームでもいいのですが、それをみんなの前で、1年間くらいかけて、半年でもいいのですが、町民の方と、「これはいい、あれはいい、これはいいのだけれど、こっちはちょっと」というような話を是非していただきたいのです。

そのために必要なお金というのはたいしたお金ではないと思うのです。2、300万円あれば動くと思うのです。その2、300万のお金を行政に出して下さいというと、予算付けして、議会を通して、と非常に面倒くさい話になりますので、商工会から100万、銀行から100万、スーパーから100万でちょうど300万になるでしょう。それで5チームに20万くらいずつ積んで、20万とか30万くらい、あとそれを実現していかなければいけない、運営していかなければいけない、その運営するお金に残りのお金を回していく。そういうことをやっていくと、中心部をこうしたい、単なる商店街、商工会の人たちに任せておくだけではなくて、こんなアイデア、こんなやり方ができるのではないかなということがそこから出てくるような気がするのです。

それで僕は、1回目のときも中心部というのはいろいろな事情があって踏み込めなかった。今回も中心部は大事だと思って、皆さん頑張って議論したのですが、やはり時間が足りなかったのです。けれども中標津の魅力を外部発信するために、或いはそこに来て実感するためには、5つの町内会も大事なのですが、中心部というのが大事、中心部=商店街ではないのですから、それをどうするのか、そこが皆さんの知恵の出どころ、それから企業のお金の出どころとなってきます。ですからその300万を集めて下さい。

### (栗崎コーディネーター)

大変適切なアドバイスを頂きました、どうもありがとうございました。

感じとしては私もやりながら、もっと時間をかけたらもっと何かできるかなとも思うのですが、時間も際限なく続けるわけにもいきませんので、まずこれを1つのきっかけに、ぜひとも町民の皆様方の色々な意識を高めていただくというような意味で、また色々取り組みをして参りたいと思いますが、今日の論点をまとめてみま

すと、一つは小林先生からもありましたけれど、やはり町民と行政が協働で行うことなんだ。これまではどちらかという、町にお願いしてきたことなのですが、これからは私たち自身がまちづくりに参画して、より安心して、暮らしやすいまちにしていくと、こういうことがなんとなくメインテーマとして見えてきたのではないかと思います。

二つ目は地域が切実に感じている課題もあります。それらを都市マスの策定過程では、色々な形でディスカッションしました。随分たくさんの人たちがそれに参画しましたし、先ほど挙げましたように、KJ法と言って色々なことを思いつきを書いて分類をしてみたりと、色々な取り組みをしました。そういうところから今後は解決に向けて、出来ることからやっていくというお話が今、出たと思いますので、これに取り組んでいくべきだろう。

それからひとつの提案として、名前を取って『地域街づくり協議会』と付けてあります。今、5チームの競争の話が出ましたけれど、実は全員とちょっと打合せをしましたときに、あるパネラーから、どのくらい進んでやったか、この1年間で発表会をやるというような話までしました。そういう性急な話ではないと思いますけれど、どうぞ皆さん方がそれぞれここに載っているような地域の特色を生かして、この町をいい町にしていくための知恵を出し合っていたきたい。

それから当然、行政もこのような地域の取組みを後ろから支えていただき、先ほど宮脇さんからお話があった、庁内体制がきちんと整っていて、ただ単に建設課だけがやるのではなく、役場内部でもってプロジェクトを組んで一生懸命頑張っているという、これは是非今後ともそれを維持しながら、この町を作っていくという意味では、たいへんいい体制を作ったわけですから、是非行政側もこういう取り組みをしていただきたい。

そのことによって町民と協働によるまちづくりが動き出すのではないかと、というようなことを感じながら、どの程度皆さん方にこの都市マスが伝わったか自信もございませんけれど、2時間の中で何とか、いくらかでも皆さん方にこのことを意識していただけて、今後の取り組みに何とかご理解をいただければ、ということが得られればたいへん幸いです。

以上をもって、時間がきましたので終わらせていただきたいと思いますが、後は司会のほうに譲りたいと思

います。パネラーの皆さんどうもありがとうございました。それから小林先生どうもありがとうございました。では以上で終わらせていただきます。

### 閉会：中標津町建設課長 渡部 英樹

今後のまちづくりの参考になるたいへん有意義な討論をいただきましてたいへんありがとうございました。

ここで再度パネルディスカッションに参加いただきました皆さま方に拍手でお礼に代えさせていただきます。

それでは皆さま方たいへんお疲れのところ、たいへん長時間になりましたが、最後までご参加いただきましてたいへんありがとうございました。

今後私たちは行政の方の建設課が担当となりますけれど、私たちも地域の皆さま方と共にこの都市マスの実現に向けまして努めてまいりたいと考えてございます。どんなことでも気軽にご相談いただきまして、一つでも二つでも可能な部分から色々取り組んでいただきたいと思

います。それではこれをもって閉会とさせていただきます。お帰りの際は気をつけてお帰り下さい。ありがとうございました。

